

第9回市民学校①

第9回市民学校が五月十一日か
ら二十六日まで五回にわたって大
阪公民館で開かれました。
広報では、都合により受講でき
なかつた方のために、その一部を
取り上げて掲載します。

長宗我部元親のすべて

市文化財審議会議長 北岡 博氏

今から四百二十年ほど前、織田、豊臣が天下統一を目指していたころ、四国には長宗我部が四国の雄将としていました。

さて、この長宗我部氏とはどうした家柄かというと、諸説ありますが、秦の始皇帝の末えいというのが定説になっています。では、戦国時代の土佐の國の状況から説明します。当時、土佐には、御所一条家と長宗我部を含む守護七人がいました。その中で長宗我部氏は所領三千貫で他の守護と比べ貧しかったのですが、土佐の守護代細川氏の後押しがあり、他から攻められることもありませんでした。

月の後には、北の本山氏が攻めてきました。ときの長宗我部兼序は文武に優れた武将でしたが、山田、吉良、大比良氏らのついでに本山連合軍三千余の攻撃を受け、岡豊城は落城しました。兼序には千勇という男の子がおり、自刃する前に「本山へのうらみを忘れずに長宗我部を再興せよ。」と遺言し、千勇を一条家に頼みました。

一条房家は快く引き受け、千勇を立派に育て、十五歳になると元服させ、国親と名付けました。そして、本山氏と話を付け、国親を岡豊城へ帰しました。孝という武勇優れた豪族と手を組み、次第に勢力を広げていき

十五年の三十六歳で土佐を統一しました。続いて元親は四国を統一しようと、阿波、讃岐、伊予の國を攻め、十年をかけてやっと四国を統一することになりました。しかし、すぐに豊臣秀吉が四国を攻め、元親の四国制覇はわずか三ヶ月で幕を閉じ、土佐一國の領主に戻ったのです。

この敗戦は、元親軍は兵農未分離であったのに秀吉軍は戦い専門の軍隊ということが大きく影響したと思われる。その後、秀吉に仕えた元親ですが、九州遠征で息子信親を戦死させたのが長宗我部の滅亡を決定づけたと言えます。その後世継ぎ問題による内紛、そして関ヶ原の合戦での敗戦により長宗我部は滅んでいったのです。さて、本日は長宗我部元親のすべてと題していただきます。これから、別の面から元親について話してみます。

後世の歴史学者は元親のことを「あつぱれ土佐のできびと」と言っていますが、この「できびと」とはいつたい何を意味しているのでしょうか。これは当時の英雄が領地の拡大のみに力を注いでいたのに対して、元親が政治、学問、芸術の方面へも力を注いでいたことにあるのでしょう。

江戸時代、山内藩政は全国的に珍しいほどよく治まっていた。これは、おそらく元親の民政が、江戸時代に引き継がれ平和をもたらしたのではないかと、ある学者は言っています。

では、元親はどんな民政を行ったのでしょうか。元親は、法令を発し基本を示すとともに、秀吉よりも早く、長宗我部検地を行い、領国経営体制を築きました。また、文化面にも力を注ぎ、寺社を大事にし、土佐神社の再建などを行っています。

元親は、仏教とともに、儒教に対しても深い関心を持ち、この儒教を政治上の指導理念としていました。これが、有名な南学の発展につながっていきます。南学は、実際に仕事、生活に生かしていく学問であり、南学の精神は流れに流れて南国市民の心の中に伝わっています。言いかえれば元親の精神が今日につながっていると考えるでしょう。

戦乱の世における元親の学問への取り組み方に「あつぱれ土佐のできびと」を感じる事ができると思います。